

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	当事業は「聴覚障がい児童及び危険地帯に住む健常児童の双方が社会的な偏見、空爆や戦闘による心の傷から自らを守り、PTSD（心的外傷後ストレス障がい）の予防が可能になること。」を上位目標とする3年間事業の最終年度である。 事業の主幹となる子どもたちへのケアクラスにおいて、心の安定や充実を測るテストや継続的に取った成長記録の結果、1.子どもたちのコミュニケーション能力が向上し、2.自己の存在や人生観に積極的な意味合いを見いだせることができ、3.PTSD から心を守る力がつく。という目標を達成できたと評価できる。 さらに、人材育成や普及活動の取り組みによって地域社会に当ケアの理解が深まり、PTSD に不可欠な「向き合う」ための環境と、吐き出した語りを「受け止める」ための素地ができた。 通常、紛争地域における平均的な PTSD の発症率は 10%を超えているが、この3年間の事業でケアを受けた子どもたち全てにおいて PTSD の所見は 0%であり、3年間において、PTSD 予防を達成することができた。
(2) 事業内容	1. 児童への心理社会的ケアの実践 1-1. 心理社会的ケアクラス（年間） 1コマ90分のケアクラスを、各クラス週に1回開催。クラス開催実績は以下の通りであり、内容の詳細は【添付①-1】参照。 ・聴力障がい児3クラス（55人）…30コマ ・危険地帯居住児童3クラス（66人）…38コマ また、2017年2月23日に、ケアの最終段階となる最終発表会を行った。子どもたちの家族や地域の方々379人が参加するなか、ケアを受けた子どもたち121人全員が、舞台発表と展示を通して1年間の成果品を披露した。これによって、一人一人が自身の心と向き合い心の整理をすることができ、強い自信を持ってケアを終了することができた。 1-2. 統合クラス、オープンディ（課外活動）の実施（年間） 障がい児と危険地帯児童混合で60人と61人の2クラスに分け、隔週日曜日に2時間の統合クラスを開催。各クラスとも年間15回実施した。さらに、年間2回、4月と2月にオープンディ課外活動を開催。市内の競技場を貸し切り、普段の環境よりも開放的なグラウンドで、レクリエーションを通して交流を深めることで、お互いのストレスやトラウマを共有する時間を持った。 1-3. 夏期修学旅行（サマーキャンプ）の実施（6月） 5/28（土）～6/2（木）市外の余暇施設にて、障がい児・危険地帯児童121人全員を対象に、少人数の集中ワークショップを行った。 保護者など地域の大人の協力を得て、子どもたち同士の関わり合いを深めるのはもちろん、新しく出会う大人との交流も行うことで、より一層のコミュニケーション能力の増進、自己の内面の洞察、心的外傷の理解と PTSD からの予防力向上を目指した。

1-4. 学校や家族との情報交換（年間）

電話連絡や個別訪問などで学校や家庭と連携を取り、ケアクラス外での子どもたちの様子をこまめに把握し、日々のケアに役立てた。

学校との情報交換

危険地帯児童に関しては、年間4回（2016年4月、6月、9月、2017年2月）学校の担任の教員へ、質問紙に回答してもらう形で子どもたちの学校での様子を把握。個別の対応が必要な子については、教員への電話連絡や学校訪問を行った。

障がい児に関しては、学校でケアクラスを開催している関係で、教員との密な連携がある上、毎月1回教員とファシリテーターとの会議を持ち、子どもたちの学校での様子を把握した。

家族との情報交換

事業開始時期と終了時期の計2回、子どもたちの家族を対象に、心理社会的ケアを理解し、保護者同士が懇談できる場を設けた。

〔第1回〕2016年4月10日…心理社会的ケアクラスの説明会と
意見交換会

〔第2回〕2017年2月6日…地元クリニック医師の基調講演と
心理社会的ケアの成果意見交換会

2. 人材育成**2-1. ファシリテーター養成講座（年間）**

事業地にて青少年活動に従事する5名を選出し、全5回の講義を行ったほか、各研修生が月に1回以上、1-1の子どもたちへのワークショップに参加。実践に即した研修を行った。講義の開催実績は以下のとおり。

①	5月19日	心理社会的ケア入門講座	桑山専門家（医師）
②	7月20日	映画ワークショップ概要 講義	桑山専門家（医師） 石橋専門家 （ワークショップ専門家）
③	11月8日	映画ワークショップ実践 講座	森専門家（映像専門家）
④	12月10日	演劇活動実践講座	ガッサーン氏 （ガザ市の私営児童館指導員）
⑤	2017年 2月4日	心理社会的ケア成果から 学ぶファシリテーション	ヤシーン氏、ラーエッド氏、モ ハマッド氏（当団体職員）

2-2. 海外研修（開催不可）

2-1の研修生のうち、モハマッド・マンスールを選定し、日本招聘研修の準備を行ったが、政治的理由により中継地のヨルダンビザが発給されず、招聘不可となり、研修を中止せざるを得なくなった。

2-3. ERS 教員との学習会

提携団体である ERS にて、月1回のペースで学習会を行い、年間合計11回開催。ERS 教員20名程度と当団体のファシリテーター及び事業担当者6名が参加し、当事業で作成した心理社会的ケアマニュアルを元

	に、心のケアの勉強会、ケアの成果と課題の共有、子どもたちの課題や成長に関する情報交換、手話学習を行った。 3. 心理社会的ケアの普及活動 3-1. 「心理社会的ケア」シンポジウムの開催（1回） 心理社会的ケアに関する最新の知見の共有を目的にシンポジウムを開催。パネルディスカッション形式で、地元の心理・子ども関係の専門家を5名招き、「ガザ地区における教育カリキュラムと心のケアの実践」と題してそれぞれの知見を話し合った。当団体からは、当事業の概要と成果を報告し、各所で子どもたちの活動に当ケアを活かす可能性を論議した。 3-2. 心理社会的ケア実践マニュアル制作 2-3ERS 教員との勉強会の機会に、2-1 で養成している5名の研修生・20名のERS 教員・6名の当団体職員が、事業2年次に作成した英語版心理社会的ケアマニュアルを元に理論の勉強を重ね、ガザでの知見を交えたアラビア語版の実践マニュアルを制作。100名に配布した。 【添付①-1】写真報告内にマニュアルの写真を添付した。
(3) 達成された成果	<u>直接裨益者数： 126人（達成状況100%）</u> ●ケアクラス（聴力障がい児）・・・55人 ●ケアクラス（危険地帯居住児童）・・・66人 ●ファシリテーター養成講座・・・5人 <u>間接裨益者数： 1,426人</u> ●ケアクラス 子どもたちの家族：121人 × 5人 = 605人 ※家族平均5人とする ●養成講座研修生が対する当事業被益以外の子どもたち ※研修生1人につき児童30人程度に対する青少年活動を平均2クラス担当した。 ：5人 × 30人 × 2クラス = 300人 ●毎月の心理社会的ケア勉強会に参加したERS 教員：20人 ●シンポジウム参加者：122人 ●最終発表会参加者：379人 以下に事業内容1. ～3. について、事業申請時に示した「成果を図る指標」に沿って成果を報告する。 1. 心理社会的ケアの実践 指標1）GHQ テストおよび、指標2）バウムテストによる評価 事業開始時（2016年3月実施）と終了時（2017年2月実施）に、被益者である子どもたち全員にGHQ テストおよびバウムテストを実施し、下記の通り前後の平均点を比較したところ、有意に改善（差）が認められ、目標達成となった。テスト解析結果の詳細に関しては、【添付①-2】参照。 バウムテスト ・占有率（精神的なエネルギー量を推し量る指標） 聴力障がい児… 54%→63% : P 値=0.011

危険地帯居住… 56%→63% : P 値=0.024
 ・実の数（夢や希望の量を推し量る指標）
 聴力障がい児…17.8 個→23.8 個 : P 値=0.085
 危険地帯居住…40.1 個→48.1 個 : P 値=0.022

GHQ テスト（一般健康質問紙）

※数値が低いほど精神的な健康度が高い

聴力障がい児…11.7 点→ 8.17 点 : P 値=0.00037

危険地帯居住… 9.6 点→ 8.3 点 : P 値=0.167

指標 3) 教員と家族へのアンケートによる評価

2017年2月の事業終了後、ケアクラスに参加した子どもたちの保護者と教員にアンケートを取ったところ、20名の教員と80名の保護者が回答。うち9割が「ケアクラスに参加させて子どもたちが成長した」と回答し、目標としていた6割を上回り目標達成となった。

さらに、ファシリテーターが家族や教員からの報告を加味し、全員の子どもたちの成長記録を取ったところ、内向的な子が友達とのコミュニケーションを積極的に取れるようになったなどの成長が確認できた。そのうちの3人の記録を【添付①-3】にて報告する。

2. 人材育成

指標 1) ファシリテーター養成講座の成果

人材育成の成果を確認するにあたり、当初予定していた事業終了時の筆記試験を課したほか、2017年1月のワークショップにて、各研修生に1コマずつ、ケアクラスのアシスタントを担当させ、当団体现地職員がファシリテーション実践に関する評価点をつけた。さらに、全5回の研修会の参加態度を加味して総合成績を出した結果、5名全員が8割以上の点数を獲得し目標達成となった。研修生の詳細は以下のとおり。

順位	研修生氏名	職業	総合成績
1	モハammad・アーベッド	提携団体事務職員	95%
2	モハammad・マンスール	学生	95%
3	アシャラフ・アブ・ムーサ	学生	90%
4	ファトマ・アブ・タレブ	提携団体ボランティア	90%
5	ライラ・アブ・ジャザル	提携団体ボランティア	85%

3. 心理社会的ケアの普及活動

指標 1) 心理社会的ケアシンポジウムの成果

参加者は、地元 NGO 等で子どもに対する活動を行う職員、教員や心理関係の専門家など合計122人となり、目標としていた50人を大きく上回った。

また、シンポジウムの有意性を問うたアンケートの結果、参加者の6.7割が「大変参考になった」と回答し、「参考になった」という回答と合わせると、合計8.9割が心理社会的ケアへの理解を深めることができ、目標としていた6割を大きく上回った。また、「シンポジウムで学んだ心のケア手法を日々子どもたちとの活動（授業）に活かしたい」というコメントも多く見られ、当事業を地域に広げるためのきっかけを作ること

	ができた。 指標 2) 最終発表会の成果 最終発表会の舞台発表にて、音楽と映画ワークショップでの成果作品を披露し、子どもたちの活動写真とともにケアの内容と意義を説明する場を設けた。合わせて展示発表にて、心のケアの成果品である描画、粘土、ジオラマ作品を展示した。 参加者は379人となり、目標としていた300人以上を達成。アンケートにて、成果品と子どもたちの姿を目の当たりにして感じる当事業の有意性を問うたところ、7.8割の参加者が「大変有意義だと思う」と評価しており、目標の6割を上回っての目標達成となった。 指標 3) 心理社会的ケアマニュアル作成の成果 当団体现地職員が地元 NGO 5 団体を訪問し、合計100名の青少年活動に従事するスタッフにマニュアルを配布。同時に、心理社会的ケアの基本講座を開催し、当ケアを日々の青少年活動に活用するための学びを深めることができた。
(4) 持続発展性	<u>地域の心理社会的ケアへの理解と拡大を求める声</u> 閉鎖されたガザ地区では、占領によるストレスが原因で PTSD が蔓延しており、人々の心のケアへの関心は非常に高い。当事業は、PTSD の予防を目標にしている点と、地元の人々の心性に合う「表現活動」を通じたケアであるという点が注目され、期待と共に地元を受け入れられた。 さらに、3年間の事業を通して多くの成果を残したことで、地元ニーズに合った有益なケアであるとの評価が広がり、地元メディアに度々報道されることによって、広くパレスチナ全土に理解を広げることができた。今年度の主なメディア報道は以下の通り。 2016 年 11 月…「パレスチナスペース TV」が、森専門家による映画ワークショップ指導の様子と、当事業の概要についてのインタビューを 20 分間の特集として放送 2017 年 1 月 …シンポジウムの様子を地元ラジオ番組が生放送 2017 年 1 月 …現地有力 web 新聞「ドゥニア・アル・ワタン」が、シンポジウムの様子をニュース記事にて発信 ケアクラスに参加した子どもたちの保護者や、当事業3年間のうちにケアクラスを卒業した子どもたちによって、当事業の有効性が実感と共に地域に理解されている。これに合わせて、当事業での普及活動の結果、地域で子どもたちとの活動を行う様々な団体から、心理社会的ケアを取り入れたいとの声が上がっており、うち4団体からは具体的な相談を受けるなど、当ケアの実践を視野に入れている団体が多数あることが確認できた。さらに、子どもたちに限らず、ガザ地区の様々な年代に当ケアが必要であるとの意見も多く、地域社会から、当事業のさらなる発展を求まれている。 <u>心理社会的ケア実践に関する知識を当地に移転</u> 当事業の2. 人材育成の取り組みで学んだ研修生および教員は、心理社会的ケアの基礎手法が教育現場に有益に働くものであると認識し、授

	業や課外活動で子どもたちと接する際、当手法を積極的に活用している。このように、学校や課外活動の現場で子どもたちと接する教員や指導員を人材育成の対象者としたことで、当ケア手法が地域で継続的に活用されることになった。 本事業での各取り組みにて、心理社会的ケアを実践する際の指導書となるリソースをまとめ、2-3の勉強会の機会に提携団体（ERS）職員と共有することで、当ケアの実践に関する知識を提携団体に移転することができた。心理社会的ケアマニュアル、人材育成活動で行った座学の講義内容や、派遣専門家が研修生や当団体職員へ行ったアドバイスの内容、ファシリテーションのポイント、日々のクラスでの記録がそのリソースである。20名のERS教員が2-3の勉強会の際、これらのリソースについて学びを深めることができ、提携団体に心理社会的ケアを実践できる知識を移転することができた。 <u>今後の取り組み</u> パレスチナ全土への当ケアの普及を目指し、新たに日本 NGO 連携無償資金協力をいただき、2017年3月より「ガザ地区・ヨルダン川西岸における危険地帯居住児童に対する心理社会的ケア及び実践者育成事業」を開始した。 ガザ地区においては、当事業での成果を受け、現地の人々同士で当ケアを実践するための確実な実践力と、強固な現場指導体制を作ることを目指している。ヨルダン川西岸地区においては、当ケアを導入することが初めてであるため、普及と拡大を視野に入れながら、ケアの実践と人材育成を行う。
--	--